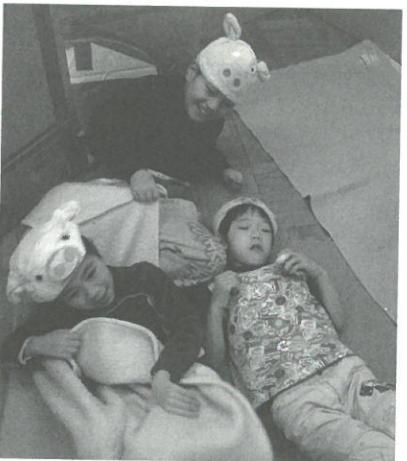
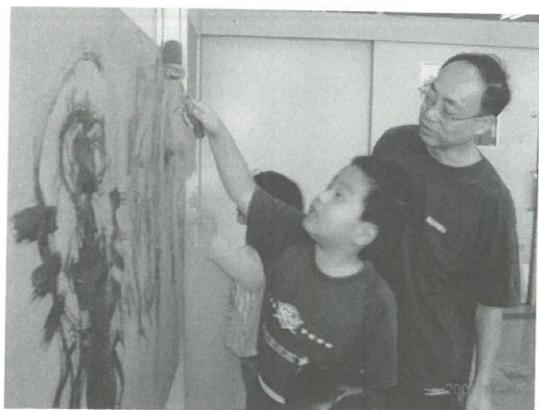


『この子と歩む』

こんな人生もすてたもんじやないねえ



「弟に障害があるって友だちに言つた瞬間の、あの『間』が嫌なんだよねえ」
姉いわく、「障害児一家が意外と楽しく暮らしている」とは、なかなか思つてももらえないそうです。私たちにしてみれば、「そうだった！うちの子も障害児だった！」という感じです。2015年の春、翔陽は養護学校の高等部に入学しました。振り返ると、彼とともに過ごしてきたことで、私も世間一般の「子育て」から開放されていったように思います。

◆一変した生活

最初は、子育ての本を見たり、おばあちゃんが言うようにやつてみたり、私もそんな母親でした。しかし、お姉ちゃんが「ほんやり」系で、そのくせ「やりたいことは怒られてもやる」、「嫌なことは頑としてやらない」という徹底ぶりでしたので、私には子育てが向いていないんじゃないかと思つていました。第一子がお腹にいるときには、「今度はもつとまじめに育てよう」でした。

なんということでしょう。そこに生まれたのが翔陽でした。

翔陽が歩けるようになると、我が家は一変しました。破壊と再生、逃走と追跡のくり返しです。壁紙はめくられ、棚は倒される。電化製品は箱から出した途端に破壊される。出してあるものはとっくに破壊されている。片づけているスキに家から抜け出す。しかも服もすぐ脱ぐので、オムツ姿！ご近所のおばあちゃんにこっぴどく叱られたこともあります。

保育園入園後は、一日として園で最後まで過ごせたことはありませんでした。保育園でも大変だったのか、9時に送つていくと、毎日のように9時半には「熱があるので迎えにきてほしい」と電話がありました。しまいには、保育園のそばにある、歩道橋を見ただけでも大声で泣きわめくようになりました。

いろいろな方に相談しましたが、「男の子だから」と笑い飛ばされました。そんな時、買い物中の翔陽を見た友人が、知り合いに相談してくれました。

「自閉症じゃないかな…」

調べてみれば、次々と当てはまります。言葉が遅い。走り回る。目線は合わせるけれど、音の反響が怖くてお姉ちゃんとお風呂に入れない。ああ。もつと早く知つていれば――。障害がわかつたのは、3歳11ヶ月のときでした。

――なんだ。私が間違つてたわけじゃないんだ。児童相談センターからの帰り道、見上げるとまぶしかった木漏れ日は、きっと忘れない。育て方を変えたらいいんだ、と希望に満ちた想いは今でも思い出せます。

*

その後、保育園をやめて、市立の療育園に通うことにしました。しかし2カ月が過ぎ、通園と仕事の両立で私が倒れたので、母子分離の療育園を紹介していただきました。
療育園では、ものを作る楽しみや音楽に触れるよろこびに出会い、内より、友だちと追いかけっこができるようになりました！その生活が彼に合っていたのか、いつの間にか泣きわめくこともなくなりました。

今思えば、歩道橋を見ると泣いていたのは、「パニック」と呼ばれるものだつたんだなと思